

中頓別の銘菓を残さなくては！という思いから 事業継承の道を選んだ24歳

中野 巧都 (なかの たくと) さん

株式会社ナカノ代表取締役

1995年札幌市生まれ。高校卒業までを札幌で過ごし、2015年より中頓別町地域おこし協力隊として活動。任期満了後の18年4月、中頓別町の菓子舗を事業継承し、「中野商店」としてリニューアルオープン。地域に根差したお菓子屋を目指している。

中野さんと奥さんの未琴さん

北海道に移住(1ターン、Uターン)して、新たな取り組みを行う輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーかとうけいこさん。

第6回は札幌市出身の中野巧都さんです。

地域おこし協力隊員当時はどんな仕事をしていましたか

お土産開発などが仕事の中心でした。中頓別町の特定の農家の生乳だけを使って作った「なかとん牛乳」を原料としたカッテージチーズの試作などに携わっていました。その中で、自分はものづくりが好きだと気が付きました。そして、地元の特産品をもっと発信したいという思いが芽生えたのです。協力隊員の任期終了後は、なにか商売をやりたいと考えていました。

菓子店を事業継承することになったきっかけは

中頓別で暮らし続ける方法として、商売をしたい。そのために起業しかないと考えていた時、町内で75年続く「とらや菓子店」さんが店をたたむらしい、そして経営者の三浦陽一さんが店舗を継いでくれる人を探

しているという話が僕の耳にも入りました。その話を聞いて、とても驚きました。人口1,700人の町に2軒も素晴らしいお菓子屋さんがある中頓別は近隣の町の方からも、すごいね、文化度高いよねと言われていたからです。そのお菓子屋さんをなくしたくない、なくしてはいけないと思いました。それで、勇気を出して「自分に継がせてほしい」とお願いしました。三浦さんは菓子職人の経験もない、よそから来た若造の僕に任すことには、当然躊躇されたと思います。でも、「譲ろう。教えるから」と言ってくださったのです。機材や器具もすべて譲り受けたことも含め、有難いと言えません。

修行はどのようなものでしたか

2017年6月から閉店の9月末までわずか3カ月、三浦さんについて学びました。師匠であることは勿論、本当の親のように接してくださったことに感謝しています。朝6時から夜遅くまで仕事のやり方を見せてもらいました。まさに真似て学ぶという形ですね。朝昼晩の食事も毎日ご馳走になり、親子のような関係ブラ

